

シイタケほだ木から羽化した昆虫類 (I)

福岡県林業試験場 大長光 純
金子周平

ハラアコブカミキリ調査用のほだ木から各種の昆虫類が羽化したので、今回はそのうちからカミキリムシ類について報告する。

調査方法

調査木は福岡県上陽町のクヌギを1977年11月伐採玉切、1978年春植菌仮伏した。仮伏地は標高約450mのヒノキ幼齢林で、周囲はスギ、ヒノキ、クヌギなどの人工林である。仮伏木のうちから虫害の多いと思われるもの約600本を選び、1978年8月9日に当林業試験場網室内に運び、羽化してくる虫を調査し網室内から取り除いた。また時期別にほだ木を割材し材中の種類と虫態を調べた。なおほだ木は長さ1m直径は10cm以下の小径木がほとんどである。

羽化状況および生態

1978年8月から1979年9月未までの羽化数は表-1のとおりである。また半旬毎羽化状況は図-1, 2, 3, である。カミキリのなかでヒメクロトラカミキリは福岡県新吉富村の一年生ほだ木の腐朽部から羽化し

表-1 カミキリムシの羽化頭数

羽化年	1978	1979	計
ヒメスギカミキリ		9	9
クビアカトラカミキリ	53	43	96
シラケトラカミキリ		5	5
クスジトラカミキリ		10	10
エグリトラカミキリ		286	286
ゴマフカミキリ	347	2	349
ナガゴマフカミキリ	4	220	224
カタジロゴマフカミキリ	4	7	11
セミスジコブヒゲカミキリ		1	1
ハラアコブカミキリ	3168	13	3181
ガロアケシカミキリ		2	2
ヒメクロトラカミキリ※		18	18

※ 新吉富村一年ほだから羽化

てきたもので参考までに掲げた。

ヒメクロトラカミキリを除く11種のうち個体数が多く重要と思われるものは、ハラアコブカミキリ、ゴマフカミキリ、ナガゴマフカミキリ、エグリトラカミキリ、クビアカトラカミキリであろう。

ほだ木割材による幼虫の食害状況は、ゴマフカミキリ類やハラアコブカミキリは樹皮下、トラカミキリ類は材中を加害していた。しかしハラアコブカミキリに樹皮下をほとんど食べられたほだ木でも、ナガゴマフカミキリは材中に潜入り生息していた。またほだ木がかなり乾燥した部分にもトラカミキリ類やハラアコブカミキリはみとめられたが、ゴマフカミキリ類は乾燥部分にはいなかった。

ほだ木に産卵された時期は1978年の春から夏にかけてと思われる。そこで羽化時期をみると、ハラアコブカミキリ、ゴマフカミキリはほとんどが1978年中に羽化しており、卵から羽化までに半年程度である。なかでもゴマフカミキリは8月末から10月に羽化し、2月に野外で成虫を採集したこともあるため、当地では少なくとも一部はハラアコブカミキリと同様に成虫越冬しているものと思われる。次にクビアカトラカミキリとカタジロゴマフカミキリは年内と翌年にそれぞれ同数程度羽化するが、残りのカミキリは全部あるいは大部分2年目の1979年に羽化した。2年にわたり羽化したカミキリのうち、ハラアコブカミキリ、ゴマフカミキリは図-1に示すように1年目と2年目の羽化時期はほぼ重なるが、図-2に示したナガゴマフカミキリ、カタジロゴマフカミキリ、クビアカトラカミキリでは羽化時期は重ならず、産卵期は同一であっても一見年2化性のような傾向を示した。このような羽化時期のずれは、同一時期羽化数の減少で交尾行動に不利に作用すると思われるが、原因は不明である。

引用文献

- (1) 草間慶一：日本産カミキリの生態と分布一覧表、新しい昆虫採集案内(Ⅲ)、P P 284、内田老鶴圃新社、東京、1978
- (2) 小島圭三、林匡夫：原色日本昆虫生態図鑑Ⅰ、P P 93、保育社、大阪、1969

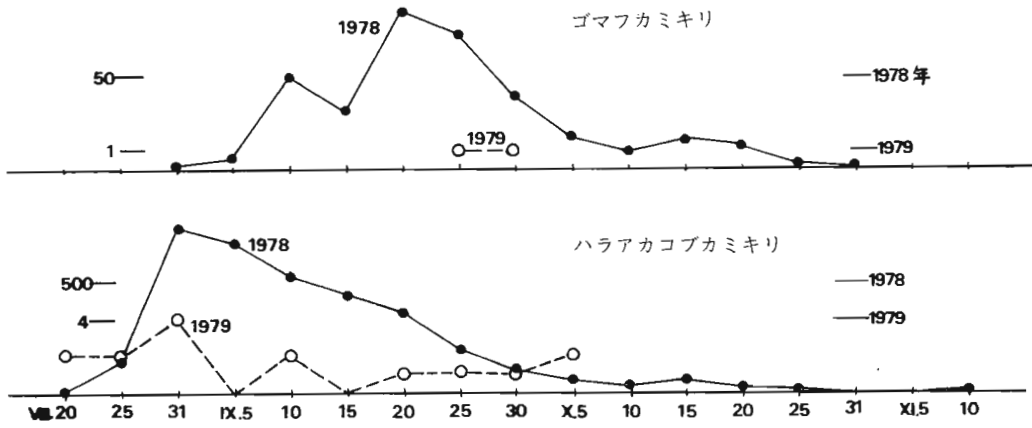


図-1 2年にわたる羽化(I) 一単位は頭数一

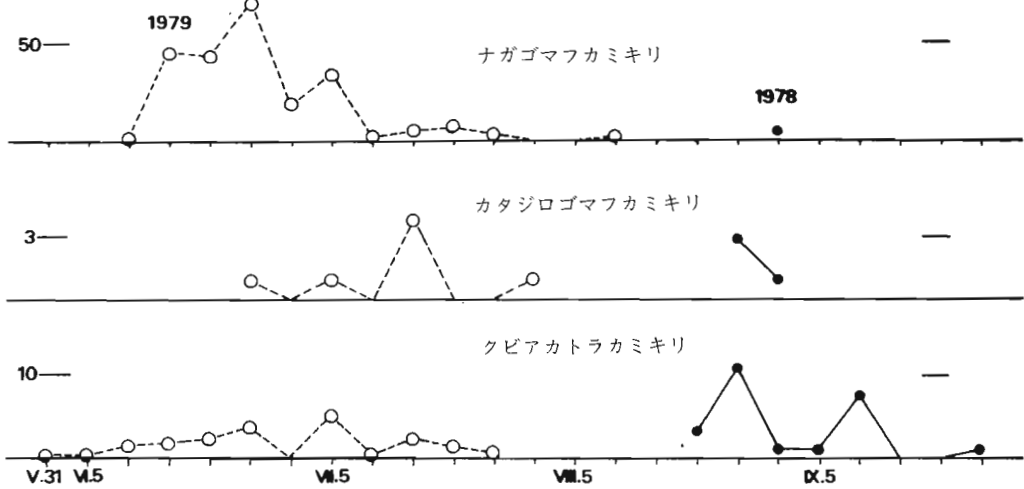


図-2 2年にわたる羽化(II)

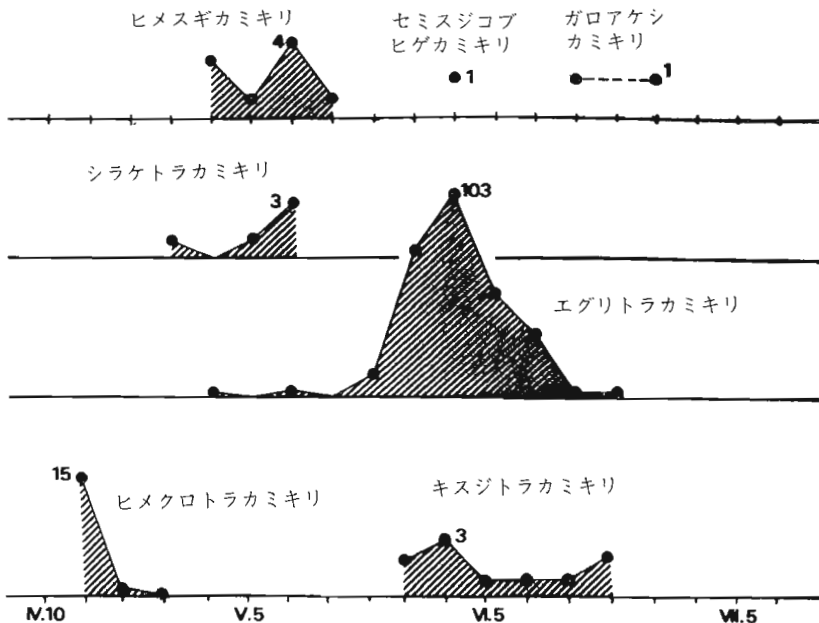


図-3 1979年のみの羽化—数字は最大羽化頭数—